

# 社会福祉と宗教(第2報)

— ロージャズのカウンセリング理論と禅学の接点を求めて —

紫 民 芳

(社会福祉学研究室)

Social Welfare and Religion (Part 2)  
— Searching for merging points between  
Rogers's Counseling theory and Zen doctrine —

Tamiyosni MURASAKI

## I 緒 論

社会福祉は、その発展過程において社会生活上の困難を解決するための個人関係の援助(helpful of personal relationship)即ち、社会生活適応を中心とする視点と、国民の生活水準(standards of living)の問題で表現される二つの体系をもつといえる。前者の場合は、その活動の当事者はワーカーとクライアントで、その主体的側面に立ちながら、社会関係を背景とする人間関係の科学である。この関係は社会福祉の方法論、専門技術の診断による人間相互に作用する個人的関係であり、後者の場合は、国及び地方公共団体における制度や組織に深くかかわるもので、終局においては全体社会の社会福祉の方向づけ、国家責任における社会保障制度のあり方に関連する巨視的視点に立つものといえる。この構造的体系を基盤に本誌第19号では、わが国における仏教とキリスト教の慈善救済の社会福祉事業がどのような思想背景と形態によって形成され、また変遷してきたか、そして社会福祉事業の歴史において宗教の慈善救済事業が社会的に果たした役割、そして先人の宗教的態度と福祉の理念など極めて概略的ではあったが論考を試みた。そこで本誌では、人間愛を基底とする人間相互、即ち社会関係を背景としながら、その活動の当事者たるワーカーとクライアントの関係を究明しようとするものである。そして特にロージャズのカウンセリング理論と仏教教理、殊に仏陀の実践せられた対機説法、禅学悟道の境地とロージャズ理論のめざすものとの接点を求めようとした。もとより研究といっても、ほんの序盤であってこれから乏しき才能をか

けて研讀を積みねばならぬ。そもそもこの研究にいささかの関心をもつようになったのは、筆者自身が図らずも禅寺に生を受けるという縁深きものであったことと、たまたま相談業務に係わる機会を得たことからである。転識智得という仏道実践の過程、禅学の根本義とも云うべき不立文字、教外別伝、直指人心見性成佛など、悟道の精髄は極めて難解で理解することすら困難な中で、誤解や誤用が多いにちがいないと思う。ただ因縁に邂逅した学徒として謙虚に学びたいと思っている。

## II カウンセリング入門

### 1. ロージャズの生い立ちとその理論

カール・ロージャズ(Carl R. Rogers)は、25年間にわたる豊富な臨床経験から、クライアント中心主義、非指示的カウンセリング(non-directive Counseling)を提唱したが、その理論の基底には、人は「成長への力」、「自己実現への傾向」があると確信したからである。そして彼は「私の経験では、人間は基本的には、人類の信頼に足る一員なのであり、むしろ私は、十分に人間になる(fully to be a human being)ということは、この地球上で、最も適応的な生物になって行く複雑な過程に入りこむことであると信じていたのである<sup>(2)</sup>」といっている。彼のこの発見には、実は彼自身の生い立ち、経歴が大きく影響していることは言うまでもない。特にロージャズ全集「人間論」で述べている如く、彼の家庭は倫理的にも宗教的にも非常に厳格であったようである。性格的には孤独でたえず読書をし、内にとじこもりがちであったと

いっている。彼の父親は子どもの教育のため、わざわざ都会から遠く農場を買い、そこで生活した。そしてここでの生活が後年彼の仕事に深くかかわったようである。彼は幼い頃、蛾や青虫を飼い、その方の知識は相当なものであったようである。これはある意味で彼の自主性を培ったものといえる。青年時代は一時農園経営などにも打ち込んだ。この時期の経験が科学に対する基本的な感動を身につけたと述懐している。そしてまもなくウイスクンシン大学農学部からスタートして史学科に移り牧師となる準備をした。大学2年の時、世界キリスト教学生連合会議（world student Christian federation Conference）にアメリカから派遣された。その後ユニオン神学校（Union theological seminary）に学んだり、コロンビア大学教育学部で児童相談所（child guidance center）のことを学び、その後ロチェスター児童相談所に12年間勤務した。彼はこの時期を非常に有益であったといっている。その後、オハイオ、シカゴ、ウイスクンシン等の大学を歴任した。しかし、そうした経歴の中で彼は次第に自分のものを見出していった。また神学校に在学中「私自身の哲学の道が、ここから遙かに開けてきた」といっている。彼はこうして自分の独自性と自律性に対して動かぬ確信として、比較的早くから「私の哲学」を持ったのである。この彼の確信は、そのカウンセリング理論でもいっているように、人間は基本的には善であるという概念があり、人間の内部に健康や適応への衝動があつて、その障害が除かれるならば、かなり自動的に動き出すといっている。特に彼は従来の指示的カウンセリングと非指示的方法とを区別するために次のように述べている。「非指示的な哲学は、成長、健康、適応へと向かう個人の衝動（individual drive toward growth, health and adjustment）にずっと多く依存している。それは正常な成長と発達のために人間を解放するという問題であり、また人間が再び前進出来るように障害を除去する<sup>(3)</sup>という問題なのである」といっている。

## 2. ロージャズの人間観

「私はその関係において、純粹になればなるほど、その関係は援助的であるということがわかってきた。このことは、より深層ないし無意識のレベルではある態度をもちながら、外面の見かけにおいては別の態度をとる。というようなことはしないで、できる限り自分の感情を知ることが必要であるということである。純粹であるということは、また自分自身になることを喜ぶことであり、喜んで自分の言葉、行動で、内在するいろいろな感情、

態度を表明することである。このような方法によってはじめてその関係は、真実味をおびてくる。そしてこの真実味こそ、第一条件としてとくに重要であるように思われる」として、人間関係において最も重要なものは、純粹性からあらわれてくる、真実味であるといっている。さらにロージャズは「第二の条件は、私がその人を受容し、好きになれば好きになるほど、彼が役だてることのできる関係を生みだすことができるということである。受容とは、無条件に、価値ある人間—即ち彼の条件、行動、感情がどのようなものであれ—として、その人に暖かい配慮をもつということである」として、彼は人を否定することなく、肯定し受容することにあるとしている。即ち、「それがどんなに否定的であろうと、肯定的なものであろうと、彼が過去においてもっていた態度とどんなに矛盾するものであろうと、私が彼のその時の態度を受容し認めることである。彼はこのようにして、すべての変動する姿が受容されることによって、その関係の中で暖かさと安心感を感じるものである。そしてひとりの人間として、好まれ重んじられることが、援助的関係の非常に重要な要素であると思われる<sup>(4)</sup>」といっている。さらにロージャズは、伝統的なカウンセリングにおいては、カウンセラーが、クライアントの問題を診断し、それに助言を与える様式である。しかし、それは「カウンセラー中心的」であり、指示的（directive）であると批判して、カウンセリングにおける主導性は、クライアント自身の適応、健康への力、成長への衝動を信頼し、カウンセラーは助言や指示を与えないことを原則とするものでありとし、いわゆる「非指示的カウンセリング（nondirective Counseling）」を提唱するにいたったのである。

彼はこうして自分の独立性と自律性に対して動かぬ確信をもった。それと同時に、これが人間の基本的傾向であり、どのような人間にも存在すると信じているのである。その根底には「他人の評価は私の指針にはならないということです。他人の判定は慎重に聞き、十分に考慮すべきものでありますが、私の指針とはなり得ないので<sup>(5)</sup>」という信念があるのである。殊に先に述べたように、25年間の経験を通して、「人は信頼し得るということ、少なくとも1人の人間は信頼し得る、それは私自身である」という彼の言葉は、彼の基本的な立場がどうして生れたかを物語るものといえる。

かくてロージャズのこのような自主性の尊重は、彼が愛妻に非常に感謝していることから発生しているのである。先に述べたように彼はどちらかというと、彼自身の内にとじ込めるような人であったが、その愛妻になった

人との恋愛関係によって、人を愛し、すべてを受け入れ、また人に受け入れられるという尊い経験を得ることができたのである。つまり人を受け容れられることが、どのような意義をもつか、また人を受け容れるとはいかなることか、彼はそれを身をもって体験したのである。

### III ロージャズと禅の思想

#### 1. ロージャズと禅思想のめざすもの

ロージャズは、自分が経験したことでないと言ったこと<sup>(6)</sup>もせず、他人に対してもその表現が本人の経験に立脚したものでなければ関心を示さなかった。したがって自分の経験と、他からの情報とははっきり区別する人であった。

1961年夏、ロージャズ夫妻を日本に迎えた際禅についての質問に答えて、「禅、は何かがわかるためには、それを経験しなければならないという経験重視の立場をとる。このことに全面的賛意を表わすといったのである。<sup>(7)</sup>

このようにロージャズのカウンセリングと、仏教の禅の要諦は、他人から与えられたことを学ぶということではなく、人間の内からの新たな発動に着目しており、その発動のままに生きることをめざすものである。禅の世界的権威鈴木大拙博士は「禅とは人間の奥底にある無限の創造性に徹して、これに追従していくことである」と看破せられたのであるが、禅語の不立文字は教外別伝となつてあらわれ、教外別伝はまた直指人心と通ずるものである。

ロージャズは、まずクライアントを独立した人格として尊重し、信頼を示し、一貫して理解と受容すれば、その不適応者もpositiveな方向に動きだすと思われる。といているが、それは人間の最も根本の動きとして、人間は可能性を実現させるために働く性質があるからだ<sup>(8)</sup>と確信している。彼は人間の積極的な動きに対する信頼は極めて高いが、これも数多くの臨床経験を積んだ結果得られたもので、自分は人間の一番深いところ、即ち本能のところ、どちらかといえば楽観的な見方をしているといっている。

#### 2. 禅の人間観とカウンセリング

禅は人間をどう見ているだろうか、涅槃經に「一切衆生悉有仏性」という。これは禅宗旨のもつ根本理念といえるもので、直訳すれば、生きとし生けるものは、皆仏性をもっているということである。坐禅を行ずることによって「見性成仏」する。即ち知識や思想にとらわれず、自分の胸奥に深く埋められた純粋な人間性を呼び覚ます

ことである。つまり自己の尊さを忘れた人、あるいは個人をとりまく諸事情によって認識の自由を阻止されている人達の本性を現成せしめようとするものである。道元禅師は「正法眼蔵現成公案」で「仏道をなろうというは、自己をなろうなり、自己をなろうというは、自己をわするなり、自己をわするるといふは、万法に證せられるなり、万法に證せられるといふは、自己の身心、および陀己の身心をして脱落せしむるなり」とあるが、ロージャズもまた、人間の根底には善を基盤とする「自己実現への傾向」があるとし、これが何らかの障害によって阻止されている。これを取り除くことによって真の人間性を発露することが出来るといっている。自己を忘れて、その事に同化すること、即ち脱落身心である。さらに道元禅師の弁道話において「これただ、ほとけ仏にさづけて、よこしまなることなきは、すなわち自愛用三昧、その標準なり。この三昧に遊化するに、端坐参禅を正門とせり。この法は、人人の分上にゆたかにそなわれりといえども、いまだ修せざるにあらわれず、證せざるにはうることなし」とある。

ロージャズもまた、カウンセラーとして仕事をはじめた頃は、決して今の心境、つまり人間信頼に確信はなかったのであるが、数多くの臨床経験を積んだことによって、いかなる人の意見よりも、書物よりも、自己の経験に最大の権威をもつに至ったのである。そして生涯人間性の探究を追い求め続けた人であった。さらに彼は自己の人間観において、フロイドは人間の深いところに悲観的な見方をもっているが、私は楽観的なそれであるといっている。彼の基底にある楽観的な人間観が非指示的、クライアント中心的とよばれる理論となり、すべての人はみな「成長への努力」「自己実現への傾向」を持つとの確信にいたるのである。この信念の上に彼の理論は成り立っているといえる。

正法眼蔵辨道話に「今謂自受用坐禅三昧則行仏威儀潜行密用如愚如魯而已唯喚單伝兀兀地伝自受用三昧爾」。この自受用三昧は、唯識にも法蔵の梵綱疏にも出る語であるが、自は自己で、受用は受けて用いる。正受と云うは三昧のこと。即ち、自受用三昧とは、他受用に対する語で自ら證悟して、それを自ら受用することである。カウンセリングの理論に自己受用と他人受用があるが、それは仏教でいう正受とカウンセリングの自己受用とは相通ずるところである。修証義第四章に「他をして自に同ぜしめて、後に自をして他に同ぜしめる道理あるべし、自他は時に従うて無窮なり、海の水を辞せざるは同事なり、この故によく水あつまりて海となるなり」とあるが、

これは自分も相手も失わず、自にも不違なり、他にも不違なる同時の心境を指す。他をして自に同ぜしめとは、先ず自分の慈愛で相手を包み入れることである。慈愛で包むのであるから自らその相手を生かし、相手を伸ばすのである。それを裏面から見れば結局他に同ぜしめることになるのである。即ち自分もまた相手の中に包み込まれているのである。つまりそれは自分と他人という相対がありながら、実は一つになっている境地である。舍利礼文に「入我我入」という語があるが、相手と自分とが入我我入して一体不二となり、融通無碍となるのである。すなわち自他という二元の中に一元を見出すのである。二者がかかって一如となる。しかし固有の特質はそれぞれに生かされていなければならない。

さてそもそもカウンセリングの起源は、キリスト教における懺悔の「告白」からといわれている。たとえクライアントの言動が常識的について許せないことであっても、まずこれを受容することからはじまる。しかし、カウンセラーもまた苦悩する一人の人間である。むしろクライアント以上の悩みを内に秘めている場合もあるが、カウンセラーに要求されることは、自己の問題は適度にこれを処理し、常に精神的安定を保つ訓練が必要とされるのである。ロージャーズも健康で明朗、積極的に事にあたり、楽観的な人主観をもち、根本的には人を信じ、特にクライアントの「自然治愈力」を信じ、問題解決の責任をクライアント自身に委ねることのできる人でなければならないといっている。この意味でカウンセラーは、最も民主的な人間関係の設定が出来、個人の価値を尊重し、基本的に人間を信頼し、人には人の人生観、価値感の相違があることを深く認識し、人間、この不可解なものを生涯の課題として探求しつづけなければならない。それ故にこそカウンセラーは自らの人間観を常に拡大し、もっと広い人間になるよう努めなければならない。阿含経に「人の思いは、何処におもむくことも出来る。だが何処におもむこうとも、自己より愛しいものは見出さぬ。それと同じく、他の者にとっても自己は愛しい。されば己を愛するものは、また他のものを慈しまねばならぬ」と。これは深い人間の内的経験からの志向で、自らに抱く愛を広く普遍化し絶えまざる努力の故に、誰にも親愛の情をもって接し、自ら親しみやすい雰囲気かにじみ出る人柄となり得るであろう。

上記はカウンセラーに要求される資質とも云えるが、臨濟録に「随処作主、立処皆真」という言葉がある。これは自分の置かれている場所で精一杯努力すれば、どこにあっても真実の生命にめぐりあえるという意味である。

何事にも主体性をもって随所に自己を投入して惜しまぬ愛情である。そうすれば随所に存在の意味を生じ、真実の姿に接することが出来るといえる。釈尊から二十二代インドのマヌラ尊者の偈に「心随萬境転、転処実能幽、随流認得生、無喜亦無憂」と抱わり、執れ、頑な心から解き放たれることであり、金剛經の「応無所住 而生其心」とも同じ心境である。

#### IV 相談仏教の起源

このことについては、これまでにロージャーズ理論と禅との関係の中で述べて来たが、さらに深く境中に入れば、そもそもカウンセラーが、カウンセラーたり得るのは、クライアントの存在があつてのことで、クライアントもまたカウンセラーがあつてのことである。即ち互いに、関係することがなければ、クライアントでもカウンセラーでもなくなる。この関係もまた縁起なのである。鈴木大拙博士も「自分は自分だけで自分なのであると思つてはいけません。他人がいるからこそ、自分もまた自分なのであるという事実気づかなければなりません」と。かつて釈迦は大衆を相手にしばしば対機説法をなされたが、その多くは因果の理法であつた。云うまでもないが、釈迦の人生観は徹底した平等主義と慈悲で貫かれている。殊に当時の特権階級であつた婆羅門思想を否定した。法句經の一節に「人はその生れによりて貴き者にあらず、人はその生れによりて賤き者にあらず、人はその行いによりて貴きものとなり、その行いによりて賤き者となる」と。これに知られるように、釈迦は家柄、身分、財産によって聖なるものではなく、その修業と実践をすすめる人間的存在としての人格を説いたのである。「比丘等よ、ガンガー、ヤムナー、アチラウチー、サラブー及びマヒー等のごとき大河の水が大海に入る時は、その本来の名を失ひ唯だ大海の名によって知らるるがごとく、殺帝利(クシャトリヤ)、婆羅門(ブラーフマナ)、吠舍(ヴァイシャ)、首陀羅(シュードラ)の四姓に属する人々も、その家を捨てて如来の教えたまえる出家生活に入る時は、その本来の姓と名を失ひ、唯だ釈迦沙門の随徒として知らるるに至る」と。これは13世紀末ごろ、西北インドに侵入したパンジャブ(Panjāb)五河地方を占拠した白人種族が、支配制度を目ざし征服した住民を奴隸(シュードラ、Sūdra 首陀羅))として抱束し、アーリアン人をブラーフマナ、Brāhmanā(婆羅門、司祭者)、クシャトリヤ、Kṣatriya(殺帝利、王族武士)、ヴァイシャ(Vaiśya 毘舍、庶民、農工、商民)の四階級にわけ、祭祀を司る

(10)

由思想（シュラマナ，Sramana 沙門）の一群があらわれ、婆羅門の特権思想を否定したのである。その中で最も著名なのは釈迦であった。このような歴史的背景の中で仏教は、人間存在における人格や、正道に対してあるべき位置づけをしたのである。法華経の「説法三軌」に「若し人が此の経を説くならば、まさに如来の室に入り、如来の衣を着し、如来の座に座し、衆に処りて畏る所無く、広く為に分別して説くべきである。大慈悲を室に為し、柔和忍辱を衣とし、諸法の室を座とするのである。此に処り為に法を説きなさい」ここに衣、座、室という三軌がある。これは法華経では非常に重視せられるところであるが、広く仏教全体の経理として十分な意味がある。先ず第1に如来の室に入るのであるが、室とはまさに大慈悲であり、つまるところ説法のよって立つゆえんは大慈悲だということである。大慈悲心はいうまでもないが自他一如、入我我入、能所一如の室である。次に如来の衣を着るとあるが、これは柔和忍辱の衣を着ることである。忍辱とは次にこの語句に続く「若しこの経を説く時、人が有って悪口し罵り、刃杖瓦石などを加えることがあっても、仏を念ずる故にまさに忍ばねばならぬ。」ということにつながるのである。特に仏教でいう忍辱の意義は極めて大きく、大乘仏教者の六得目（六波羅蜜）の一つになっている。ちなみに六波羅蜜（梵）sād-Pāramitā（六度と訳す）であるが 1）檀波羅蜜 Dānparmita（布施）2）尸羅波羅蜜 silapāramita（持戒）3）羼提波羅蜜 Kchanti-Pāramita（忍辱）4）毘梨耶波羅蜜 virya-Pāramita（精進）5）禪那波羅蜜 Dhyāna-pāramita（禪定又静慮）6）般若波羅蜜 Prajñā-pāramita（智慧）波羅蜜（梵）pāramitā は渡る、到彼岸、生死の苦界のこの岸を渡って涅槃（解説）の彼岸に到ると解釈する。この大乘仏教の六波羅蜜は、菩薩がおこなう実践的指導理念であり、とくに社会福祉の臨床的方法と関連して重要な意義を有するのである。<sup>(11)</sup>

さてクライアントの感情転移は、時に攻撃的、依存的、拒否的、隠しだてなど、援助者を怒らせる態度をとるような場合もあるが、この場合、忍辱、禪定（静慮）、和顔愛語など、冷静にして沈着、いかなる場合もクライアントに焦点を合わせ、これをよく受容することにより信頼感が生まれるのである。仏教的に言えば、聞法者がどのような態度に出ようと、これにあらがうことなく受容することが、カウンセラーの基本的態度といえよう。

このことで有名なのはブンナの説話である。かつて豪商であったブンナは、仏陀の説法で一念発起、仏弟子となったが、才気ひとに優れ、その弁舌も爽やかで、説法

第1のきこえが高かった。ある日師のもとを訪ね、西方アパランタカ地方に師の教説を広め伝えることの許しを請うた。仏陀は「ブンナよ。かの地方の人々は、その性甚だ粗暴にして、人を罵り恥かしめることを意に介せぬと聞いている。それに対してどのように考えているか。」これは遙か辺境にあって気性の荒い人々を相手に伝導する弟子の苦勞を思うて、師はひそかに彼の決意を探られたのである。

プ「たとえ、かの国の人々が私を罵倒し、恥かしめるようなことがありましても、なお僅かなりとも善意と誠の智慧に恵まれておれば、拳をもって私を打つようなことはありますまい」

仏「もし彼等が拳をもって打つようなことが起れば、おんみは如何にそれに対するというのであるか」

プ「たとえ、そのようなことがありましても、彼等はよもや剣を用いることはありますまい」

仏「もし、そのような手荒なことがあったらどうするのか」

プ「師よ、たとえ剣をもって私を害うことがあっても彼等の心のうちにもいささかの善意は残っておりましよう。私は彼等によって殺されることはあるまいと存じます」

仏「だが彼等がおんみの生命までも奪うことがないとも限るまい」

プ「わが師よ、もし彼等が私のこの生命を断ち、その屍を土中に投げうつことがあっても、師の教えを信ずる一人の修業者が、かつてこの地上に生きていたという事実を、その記憶のなかから消滅させることは出来ずまい。たとえ私の伝道が成果を挙げ得ませんでも、何時の日か、それは再び新たな伝道者を迎える絆となることと信じます」

仏「行くがよい。ブンナよ。おんみこそ、よくアパランタカに住み耐えることが出来るであろう。急ぎ行くがよい。そしてまだこの教えを知らぬ人々の間に、速やかに真理と救済の道を与えよ」<sup>(12)</sup>

仏陀は愛弟子を最悪の事態にまで追いつめ、それに処すべき決意を迫ったのである。それはひとりブンナの上にあるばかりではなく、道を求め、道を伝えゆくすべてのものの上に課せられた心の構えであり、思想と信仰との永遠の道程に続く呵責なき精神への圧迫でもあったといえる。かくて説法における柔和忍辱、世の迫害や恥辱に耐え忍ぶことの何たるかを知ることができる。

## V 家族カウンセリングの実際

### 1. ケースの概要

盗み, 粗暴, 喫煙, 家出等を繰り返した中学生。K少年は中学3年生であるが, 小学5年頃から問題行動があった。しかし, 家族は「わが子に限って」という盲目的愛情によって問題の事実を認めず, 学校及び地元関係者としても指導や働きかけに苦慮していた。特に1年半前頃から盗み, 喫煙, 花札によるかけ事, 盛場徘徊, 家出などの非行を繰り返してきた。この間学校側, 民生児童委員の助言指導, 忠告も幾度か受けたが効果はなかった。もっともこの背景には, 「俺の子に限って」とか「子どもの頃は俺も盗みぐらいしたものだ」と, わが子の問題を認めず, あまつさえ過去の悪事を正当化し, 盲目的にかばう両親をもてあまし, 最後の方法として持ち込まれたのである。この場合, 学校側や地域社会では本児を教護院に入所させることを強く望んでいたが, 両親との面接過程の失敗が相互の不信を拡大し, 悔蔑と差別, 反感の錯綜するなかで, 問題を一層複雑なものにした。筆者はこのような状況のなかであってK少年と週一度の面接を行い, 6回目をもって終結した。その結果K少年は教護院入所を認め, その上で父母との面談, 紆余曲折の続くなかで父母もこれを承諾, 教護院入所を正式に決定した。

本記録は第6回目のものであるが紙面の都合上一部割合する。なおK少年はIQ89 (wisc・鈴木・田中ビネー等) で, 両親健在であるが父親は病身。本ケースを引用したのは, 特に両親へのアプローチの仕方であり, 面接過程における非指示的カウンセリングの実証性と, ケースワーク的な接近としての非審判的, 非説論的態度が如何に大切なものであるかを痛感したことにほかならない。

Co やあ! おはよう

K はようす

Co 今9時だから, 9時50分まで話しあいましょう。

(ストーブをKの側に移動)。(沈黙2分5秒)

Co タベ保護所で喧嘩があったそうだね。今二人ともどうしているかね。

K 二人ともケロットしています。

Co ほう そうかね(沈黙1分30秒)

K あの一これからのことです。

Co あ、教護院に行くこと。

K あの一行くことはいきませんが, なんかおぞい(こわい)ところではないですか。

Co ははあ そうだね。友人も沢山できるし, 野球, バレーなどスポーツも盛んだし, 誕生会, クリスマ

ス発表会などもあって, 楽しいところでもあるよ。

K はい(沈黙1分)

K ぼくも, ここへ来てだいぶ落ち着いたみたいです。

Co ほう だいぶ落ち着いたみたいだね。

K 今までは悪いこととして遊ぶことしか考えておらんかったです。

Co ほう(40秒)

K ここへ来て作業もするようになったです。

Co ふん 以前より気持ちがちがってきたというんだね。

K あ、まえば学校で作業するなんていうと, はなからサボルことしか考えていなかったです。

(略)

K それに今まで友人という悪いやつばかりで(沈黙45秒)

K 馬鹿馬鹿しい……

Co 今までのことが馬鹿馬鹿しいと思うかね。

K はい やったですけん。

Co ちょっと聞くけど, どうして学校の職員室に入らんかね。鍵がかかっていて入れないだろうがね。

K 簡単です。(この辺から得意げに話す)

K 校庭で遊んでいるようなふりをしていて, 職員室に向かって石を投げてガラスを割ります。

Co ほう

K それですぐ職員室にいった, 先生にあやまります。

Co ほう

K そんな時, 先生は正直でよいといってはめてくれます。……(笑)それで学校の窓ガラスはこわれても, すぐ入れられません。(笑)

Co それで

K そこから手を突込んで鍵を開けます。

Co ほう なるほど ほう(笑)

(略)

K いろいろすみませんでした。

Co 君が自分で自分の生き方を考えたのだから, 君ならやれる(沈黙)

Co じゃこれで

K はい

Co どうも

上記の面接で過去の悪事(心の傷跡)を素直に話せるのは, かなりラポートとしていることがうかがえる。その他のコメントは省略するとして, 本ケースの場合, 児童相談所の一時保護課において受容され, 許容的雰囲気と規則正しい生活訓練を通して, 漸次安定感が生じ積極性が芽ばえてきた。但し, 本児を入所させるに至るまで

は、両親が施設入所を頑固に拒否し続けてきた。それは教護院に対する両親の認識が、かつての感化院的、前近代的で暗いイメージがあったことと、地域社会とに深い疎外感があって、常に自己防衛的で外界に境界を作り、自らも他を疎外し、他もまたこの家族を疎外するという二重の疎外感を作ったといえる。本児のカウンセリング過程は割合するとして、両親へのケースワーク的援助過程において幾つかの問題点をあげることができる。

A、本ケースの場合、まず家庭の機能は全く停止している。本問題の鍵は家庭の指導、それも特に夫婦間の不和对立の解消、調整にあるという認識に立って、初めに学校長、担任、児童委員、地元の有識者による解決への努力はなされて来た。しかし現実には冷え切った夫婦関係は、部外の介入、働きかけによっては遂に解決しなかった。「夫婦がしっかりして」とか「お互いが反省して」とか、といった説諭に対しては「話しても無駄、聞く耳をもたぬ」といった返答がかえり、すかさず「だから君達は駄目だ」、「もっとお互いが我慢して……」とか、はては「問題の家庭に問題の子ども」といった面接過程は、常に指示的で面接者の外部的準拠枠（external frame of reference）からのアプローチであって、もっと許容的、受容的雰囲気を経験させるべきであった。そしてもっと時間をかけて、相互に自己洞察し認知構造の変容をはかるようなアプローチが必要であったと思われる。

B、この夫婦の指導の不充分さの中に、学校側、地元、民生児童委員等も早期に問題解決をはかろうとして、正面から問題意識に迫った。「お前の子どもは悪い子、悪い芽は小さいうちにつまなければ」といったきめつけ方に、相手は益々たたくなくなり、その結果はどうしようもない家庭であり、夫婦であるということで、地域住民とこの家庭との軋轢、違和感等、相互の不信感が拡大されていった。更に両親の施設に対する認識も前近代的、感化院的なしべルのもので、その上地域住民の教護院入所の強い要望と相まって、遂には「反対のための反対」といった状態になり、問題解決の方法が、いたずらに歪曲したことが指摘される。

いずれにせよ本ケースは崩壊家庭の典型ともいえるもので、本家庭をとりまく地域性も充分考慮し、本問題が顕著になった時点で、緻密かつ適切な社会診断に基づいた指導がなされていたら、かくまでも問題が複雑にならなかったろうと思われる。

## VI カウンセリングにおける真実性

個々の非行に接して感ずることは、公式通りの答えは得られない。それは非行の原因はそれが複雑であるだけに一人一人の臨床像はまことに千差万別であり、その治療や処遇の仕方が異なるのは当然である。筆者が接した少年の共通していえることは、心をとぎし、反発、反感、悔蔑、ひねくれ、暴言等の堅い殻にとぎされている。彼等は自ら求めて教育されようと思っていない。したがって安易な訓戒や喪みでは彼等の殻を除かれぬ。むしろ訓戒や理屈はかえって逆効果となる。最も肝要なことは、いついかなる場合も彼等の側に立ち、常に彼等に焦点を合わせ、これを受け入れ、理解し、常に彼等と共にある姿勢が必要ではなからうか。ロージャズも、人格の転換をはかる面接において、指示的であることは知識の伝達に等しく、真の自己洞察に至る援助としては効果が薄いとっている。云いかえれば、非行を犯す少年といえども、ロージャズのいっている適応への衝動はもっている。したがって社会適応の障害を除去し、克服、解消への援助があれば自己改善、認知構造の変容をはかることは出来るのである。ただここで筆者のささやかな経験では、たとえ非指示的カウンセリングをモットーとしながらも、カウンセリングのうち知的要素の多い問題などは必然的に認知過程を説明、解答を与えざるを得ない場合もある。もとよりこれは一般的に認められてきたところであるが、最も困難なのは、長い成育過程の中で放任と溺愛、母子密着の続く中で野放図に育てられた結果、超自我、畏敬の念が育っていないということである。そのため情緒的要素の多い、ものの道理、対人関係、社会的規範などに関する問題への対応は極めて困難である。もとよりこのような場合、場面構成の設定による技術導入もあつてのことであるが、結局はその苦悩を理解し受容する以外、その方法はないといえる。非指示的カウンセリングがよい効果的であるためには、クライアントとカウンセラーの間に深い近親感があつてのことで、真の信頼関係も単にカウンセリングの技術や意図的に成立するというのではなく、やはり内から湧き出る真の共感であり、ロージャズの強調している真実性に触れる人格の相互信頼に他ならないと信じている。つまりクライアントの質問に対して、優越的であつたり、指導者意識が表に出たり、あるいは、いいかげんであつたり、現在から逃げるかたちをとるとすれば、それはやはり不誠実な態度といえる。それ故カウンセリングは万能ではないことを自覚し、いいかげんな解答することは厳に慎むべきではなからうか。あくまでも正直に真実の態度が必要あらうと思われる。

ひつ境、人はその誠実さと真実に触れた時、本当に心が開くのである。しかし、このことは終局においてはカウンセラーの人格に負うところが極めて大きいといえよう。

# 参 考 文 献

- 1) 紫民芳：本誌19 1 (1981)
- 2) 友田不二男他編訳：ロージャズ全集 12 46～58 (1980)
- 3) 友田不二男他編訳：同上 3～17
- 4) 畠瀬稔編訳＝C. W. R 人間関係論 ロージャズ全集 6 5～6 Volume vi on *Interpersonal Relationships* Chap. I A Counseling approach to human problems (Amev. I Nursing 994～997 (1956)
- 5) 友田不二男他編訳＝ロージャズ全集 12 28～29 (1980)
- 6) 伊藤博著＝カウンセリング 143～149 (1964)
- 7) 友田不二男他編訳＝ロージャズ全集 18 304 (1977)
- 8) 中村宗一著＝正法眼蔵用語辞典 152 (1976)
- 9) 友松あきみち著＝仏教聖典 76 (1950)
- 10) 中村 元著：仏教語大辞典 523 (1973)
- 11) 中村宗一著：正法眼蔵用語辞典 442 (1976)
- 12) 友松あきみち著：仏教聖典 118～120 (1950)
- 13) 台利夫他編：カウンセラー (1982)
- 14) 田畑治他編：「来談者中心療法」 (1977)
- 15) A. V. ボーイ, G. J. パイン著, 鳴沢実他訳：これからの学校カウンセリング, *Client-Centered Counseling in the Secondaryschool*, by Angelo V. Boy & Gerald J. Pine (1963)

昭和58年1月14日受理